



と、チャットという文字の書き込み機能を使

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、東京大でオンライン講義が始まった。入学式も講義ガイダンスも今年は全てオンラインだった。

オンラインを可能にする条件は全ての学生がインターネットに接続できることである。学生のネット環境の調査、教員と学生用のマニュアル作成、サポート体制づくり等々、ITに強い教員が各学部で、短期間で準備を進めた。約2年前、勤務していた三重大でインターネット整備に関わった私もその一人だ。

実際にオンライン講義をや

って届くリアルタイムの質問に答えるなど、対面式講義とは違った面白さがある。

モニター越しでは多数の学生の反応が見えにくい、各教員はいろいろな工夫して講義をしている。逆に少人数の研究室ゼミは一人一人の顔を見て話せるので対面式よりも充

コロナで変わる大学教育

不急の仕事があぶり出され、掛け声だけだった学内の働き方改革があつさり実現した。

新年度の大学は、新しい出会の場でもある。学生は生まれも育ちも、価値観も異なる人に出会うことで成長する。コロナ騒動はその機会をも奪ってしまうことが懸念さ

実した議論ができる。しかし、実験や実習、現地調査などはオンラインでは難しい。ひたすらコロナ禍の収束を待つしかない。

教授会なども全てオンライン会議になった。時間が短くなり、正直うれしい。事務職員も在宅勤務になった。不要

みた。写真を見せて近況報告し合うなど意外と楽しい。今回の騒動で、若い世代では間違いなく新しい文化が芽生えつつあることを実感した。

感染リスクと対峙して献身的に働く医療従事者や休業補償なしに感染拡大防止に協力している業界の人々を思うと

れた。しかし、学生たちは会員制交流サイト(SNS)とオンライン講義システムを使ってきばきとサークル活動の説明し、新入部員を勧誘している。

また、外出を自粛して在宅勤務している若い卒業生たちとオンライン飲み会をやって

式に戻らないだろう。少なくともオンラインと対面の会議を使い分けるようになる。

英国のニュートンは1655年、世界的に流行していたペストを避けて田舎に帰省した。18カ月間の帰省中、リンゴが木から落ちるのを見て万有引力を発見し、微分積分学や光学の着想を得たという。

オンライン講義を経験することにより、都市に一極集中していた大学の地方分散が進み、新しい大学教育システムが生まれるかもしれない。これから私立大でもオンライン講義が始まる。想定外の通信量に既存の情報インフラが耐えられるのが懸念される。

新型コロナウイルスはIT化が進まなかった日本の社会を一気に変化させた。オンラインでの会議や講義を経験した人たちは騒動後、元の対面学(東京大大学院農学生命科学研究科教授)